第8回（2023）高知県建築文化賞　講評

１．審査委員長　竹原 義二

コロナ禍にある社会の変化や地球温暖化を始めとする気候危機の高まりなど生活が安定しない。そんな中ロシアによる軍事侵攻が影を落とし、さらにイスラエルでも戦争が始まった。時代を積み重ねてきた建物が破壊され、暮らしの拠点である住まいが一瞬にして奪われる恐怖は計り知れない。

近年、大型の木造建築に関わる規制緩和が進み、木構造を表現する建築が多く見られる。火事に負けない木造建築が可能となった。そして火災の延焼を抑制する構造を持つ「準耐火建築物」の概念が創設され、３階建までであれば準耐火構造の木造建築が実現する。

今回の応募案に於ける公共建築は、木の使い方が建築家によって違っていた。地場の木材をどのように使い分けるのか、また、無垢材・集成材・CLTの使い方も違いが読み取れ、木に対する考え方に多様性があることに気付かされた。

■高知県知事賞（最優秀賞）「日高村新庁舎」

建物は老朽化した庁舎の建て替えである。敷地は既存庁舎の北側駐車場に計画された。準耐火建築物（ロー１）を選択し、経済的な合理性を考慮して、鉄、コンクリート、木の長所を生かした混構造で空間を作り出すことに成功している。

現地審査で印象に残ったのは外観の穏やかさである。高さを低く抑える為に屋根を二段階にしている。一段目の屋根は水平ラインを強調し、軒を2.5mはね出している。上層階は3mセットバックさせ、方形屋根で高さを低く抑えている点など、大きな建物の印象が全くなく周辺への配慮の深さが感じられた。

１階の天井は45°振られた鉄骨梁と２段で組まれた格子木造梁がリズミカルに天井懐をデザインし、空間に柔らかい雰囲気が感じられた。また、２階は鉄骨梁によって構造を解きながらも、地域特産の土佐和紙をルーバー状に配することで、意匠性と吸音性に特化している。３階の会議室と議場では、県産杉材のルーバーを用いることで木質空間を表現していた。各階ごとに異なる様々な要素や材が多様な空間を作り出し、意匠・構造・設備が高いレベルで取り組まれていた。

これらは準耐火建築物（ロー１）やスプリンクラー設備の整備によって、竪穴区画や面積区画・内装制限等をクリアしつつ、地域素材にて空間を設え、空間にリズムやスケール感を生み出し、心地よいワークプレイスと人の居場所を生み出すことを可能とした点を高く評価した。この建築は地方の市町村が抱えている問題点に対し、一つの解決策を示唆しているように感じた。

庁舎としての防災拠点の機能を確保しながら、緻密な設計の積み重ねによる空間構成と地場産業を活かした地産地消への取り組みなど、建設から維持管理まで綿密に検討された建築への姿勢が高く評価された。公共建築として、この町の財産になっていくことを期待したい。

■優秀賞「香美市立図書館かみーる」

街の中心地にあった既存施設の老朽化に伴い、新しい場所に建て替えられた。

敷地は車で利用しやすい場所にあり、三方が畑として残されている田園風景が広がる場に立つ。駐車場の台数を取りすぎているためか、図書館を利用する人のための公園や遊び場が作り込まれていないのが残念である。

建物は周辺環境に溶け込むように緩やかな円弧を抱いた屋根が浮遊し、景観に溶け込んでいる。見通しのよいワンルームの空間は、６つの屋根形状の円に沿って領域が分けられ居心地が良い。地域に親しまれる図書館は、目的がなくても気軽に訪れ、何もしないがその場に佇んでいるだけで心地よく感じられる居場所が作られている。多様なスペースが、一つの大きな屋根の下に有機的に繋がっているため、他者との間に程よい距離感が感じ取れた。

準耐火建築物（ロー１）を選択したことにより、外壁は鉄筋コンクリート造で固め、鉄骨梁と木造トラスを組み合わせることが可能となり、多様な材によって構成することで空間を豊かにしている。

屋根形状が複雑なために、内部空間の豊かさに対して、屋根の納まりに苦労が見受けられた。また、軒先の破風の納まりと見附の大きさは、全体のプロポーションに対して検討の余地があったのではないかと感じた。

公共建築として地域に親しまれる内部空間や居場所作りが積極的にされている点や、地産木材へのアプローチは高く評価できるが、維持管理や外部空間への視点が、もう少し感じられれば、さらに良い作品になるだろう。

■新人賞「西分の家」

高知市内から10km離れると田園地帯が広がり、集落も新しく建て替えられている。県道に面して建つこの住宅は道路側に家型のファサードを持ち、隣家とは様相を変えている。

平面は幅４間を持ち、奥行き８間の細長いワンルームで構成されている。単純なプランに見えるが内部は思いの外、立体的な連続性に満ちている。玄関から内部に一歩足を踏み入れた時、水平へと抜けていく横のつながりと、点在するボックスと外殻の間に生まれているボイドが立体的に連なり展開されている様に、普通の住まい方ではないことに気付かされた。

柱と梁によって構成された空間に、入れ子状に収められた４つの形の違うボックスが宙に吊られるように、床から建ちあがるように、掘り下げるように構成され、柱と梁が貫入されることで空間が立体的に動いていた。上階は移動する梯子でつながり、室と室が連続する空間となり、回遊する楽しみが増す。決して広くはないこの建物の内部に離散的に多様な居場所を散りばめ、規定しない居場所が見つかる楽しさを生み出すなど、毎日が発見の連続である。

外郭となる壁面には何も取り付けず、内部に設けられた入れ子の室にモノを納めると、残された余白空間が大きく見えるのは不思議である。

この家の一番の見所は、私が玄関から入った際に対峙した、大らかなワンルームと入れ子によって生み出された立体的な空間の連なりである。限られた住まいの中で見え隠れするその様相は、まるで都市の中で地と図を象るような印象を抱いた。

また、内部に建つ柱には、空間の領域区分を曖昧にし、様々な変化に対応しやすい空間の多様な使われ方を想起するような柱の精神性を感じた。

この住宅に住まわれている家族は、こういった曖昧な空間を楽しみ、暮らしを営んでいるように見受けられた。それはまさしく家族とは家という空間を共有する集団だと感じさせられるようであった。

５人家族（子どもは長女６歳を頭として３人）が、時間の中で家族の繋がりや住まい方を考え出すことで、住まいは持続することが可能であることを考えさせられた秀逸な建築である。

■最後に

最後になったが、今回の審査について記しておく。今回は11作品の中から一次審査によって８作品を選出し、最終審査では、審査委員の投票と討論により各部門賞と新人賞の選定を行った。今回、木造文化賞は議論を重ねた結果、今後に期待したため該当者無しとなった。

今回の審査を通して、現地で作品に接する大切さを改めて実感した。この場を借りて関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

(2023.11.７)

２．審査委員　内海　彩

2次審査に残った作品は公共施設が4作品、住宅等が4作品と、規模も用途も異なり、審査には頭を悩ませたが、私自身は、高知の建築文化の醸成に向けて、設計者をはじめ関係者がどのように挑んだか、という観点からそれぞれの作品を拝見させていただいた。ここでは、これら８作品、すべてについて感じたことを記したいと思う。

■日高村新庁舎

高知県知事賞（最優秀賞）を受賞した日高村新庁舎（作品番号８）はコンクリート、鉄骨、木材を巧みに組み合わせた建築である。旧庁舎を使用しながら同一敷地内に建築することで経費負担を減らし、3階の議場や附室は一回り小さい正方形プランと方形屋根によって周辺への日陰を影響を抑えた結果、実際以上にコンパクトに感じられる外観を獲得し、一方、プランニングはシンプルに解いて、内部空間に十分な広がりを感じられる。個人的には、天井から吊るされたひだか典具帖紙は地産素材の活用として直接的すぎる表現のように感じたのだが、それを差し引いても、現代的な混構造を実現しつつ、各部の木材の見せ方・納め方に、先人が積み上げてきた高知の木造らしさが感じられ、モノとしての質の高さがあった。

■香美市立図書館「かみーる」

優秀賞を受賞した香美市立図書館「かみーる」（作品番号２）も、コンクリート、鉄骨、木材を巧みに組み合わせた建築で、広い開架書架スペースの中に、弧を描く鉄骨梁と木ルーバーが柔らかく領域を作りだし、この場所ならではの風景を内部にうまく取り込んでいる。高さを抑えたなだらかな屋根のシルエットも、風景の中に馴染んでいるが、現時点では、内外のつながりが豊かに計画されているとは言い難いのが、少々残念だった。しかし、隣地の畑を公園とする計画もあるとのことで、今後より魅力的な図書館となっていくことが期待される。公共建築の設計において、敷地や施設規模やプログラムを設計者の発案で大きく変えていくことはまず難しく、いずれの作品も与条件の中での設計者の奮闘がうかがわれた。基本構想から設計者が関わっていくことは、公共空間の質を向上させる上でもプラスに働くと思われる。それを可能にする新しい枠組みが求められているのではないだろうか。

■土佐市複合文化施設「つなーで」

公共建築はいずれも力作だったと思う。土佐市複合文化施設「つなーで」（作品番号10）は、市民のさまざまな活動の場となる「ミチ空間」が建物内を巡り、図書館、ホールなど６つの機能をつなぐ計画である。吹抜けの巧みな配置とラチス耐力壁による透明感のある空間、開館に至るまでの市民参加の枠組みが、有志によるNPOの発足と開館後の運営支援へと繋がっている点など、高く評価したい。一方、本施設の建ち方や周辺との関係を見ると、“土佐の”ミチ文化の継承という点で本作品が解答なのか、という疑問が残った。

■本山町新庁舎

本山町新庁舎（作品番号３）は、7.5メートルの正方形グリッドにのった柱梁の「ストラクチャー」と、内部の様々な環境を構成する「エレメント」によって、共用エリアと執務エリアを一義的に分けず、緩やかに関係をしあうものとして位置づけ計画された庁舎建築である。とかく膨らみがちな面積要求をうまく処理し、低廉な建設コストで、グリッドプランの均質さを感じさせずに多様な場が生み出されており、設計者の高い技量が感じられた。「ストラクチャーとエレメント」は手法として非常に興味深いのだが、本山町新庁舎のような規模において、魅力的な空間を生み出しうるのかが気になるところであった。

■西分の家

新人賞を受賞した西分の家（作品番号７）は、家形のボリュームの中にキッチンや水回りのボックスを配置、和室を宙に浮かせたり床を彫り込んだり、様々な操作がなされた住宅である。子どもたちの成長に従って、今後どのように住みこなされていくのか、設計者も長い年月をかけてクライアントに寄り添っていくことで、色々なものを得られるだろう。

■三角のアトリエ

県民審査で最多得票を得た三角のアトリエ（作品番号11）は、いい意味で予想を裏切る作品で、ファンズワース邸を思い起させるプロポーションの住宅との対比によって、印象がすっかり変わった。作品の魅力を的確にアピールすることも重要である。

■東久万の家

東久万の家（作品番号６）は、配置の難しい三角形の敷地に小さな工夫を積み重ねて住み心地の良さそうな住宅に仕上がっている。大工や左官、板金の職人との連携を築いている設計者だからこそできる挑戦もあると思うので、今後ぜひ意識的に殻を破っていって欲しいと感じた。

■南久万の家

南久万の家（作品番号９）は、道路とのレベル差を活かし中庭を中心に計画された住宅で、客人を泊めるはなれを持つ。広い敷地を伸びやかに使った住まい方は、大変気持ちよさそうだが、屋根架構をもっとシンプルにできると良かったのではないだろうか。

（2023.11.6）

３．審査委員　渡辺菊眞

のっけから私事で恐縮であるが、高知県建築文化賞の審査委員をつとめるのは今回で５回目である（2013,2015,2019,2021,2023）。最初から10年が経ち、その間に新型コロナウイルス感染症の流行や、各種建築資材の高騰など、社会状況に大きな変化があった。さまざまな変化がある中で、建築の思考や、「つくりかた」にも当然変化が生じてくる。しかしながら、同賞の審査において私にとっては変わらない中核があると感じている。2019年の審査講評において、冒頭に『「高知県建築文化賞」、この主題を思うとき、「高知県」の「建築文化」をいかにとらえ、それをいかに発展的に未来へつなげていくかが問われる。』と記し、末尾では『あらゆる地域を渡り歩き建築すること。土地に根をおろし建築を続けること。この両者の試みと蓄積が、互いに振動しながら止揚し新しい建築文化として昇華していくこと。そんな有様が理想だと考える。高知県建築文化賞はそんな展開への一助になるのなら素晴らしいものだと感じている。』と結んでいる。2023年現在においても、その思いは変わらない。

■４つの公共建築

１次審査を通過した、４つの公共建築－「日高村庁舎」「本山町庁舎」「香美市立図書館かみーる」「土佐市複合文化施設つなーで」のうち、「日高」が「地の建築」、残り３つが、高知外に本拠をもち、全国各地で建築をものする建築家を主体として作り上げられた、「風の建築」（この言葉が適切であるかは、定かではないが）である。「風の建築」においては各自が備えている建築思考と技術が、高知という場に出会うことでいかなる化学変化が生じ、新しい「地の建築」になるかが「見もの」となる。

３作品それぞれにおいて土地で出会った「もの」や「こと」への読み解きはあるものの、そこに基づいた発見性ある空間構築にまでは至っていない。むしろ、各自が蓄積し備えている思考や技術そのものが色濃く出すぎている感がある。

そのうち「かみーる」は、香美市郊外の「なんてことない風景」と反応する幾つかの領域が柔らかく設定され、その領域の補集合となる余地が平屋建築の蛇行する脊髄を形成し、風景呼応のひとつながりの空間をなしている。そこに、他にはない魅力を感じた。ただし、このことの実現に際し、本当に３種混構造が最適なのか、内部空間形成の結果として現れたであろう、建築全貌が分厚い軒を含めて鈍重な印象をあたえてしまうなど、気になる点がないわけではない。

「日高」であるが、こちらは「地の建築」である。これまで実験を重ねて蓄積させてきた、３種混構造（「ロ準耐建築」）による建築構成の確かさ、CLTなどの新素材を含む多種木造の混成、土佐和紙や土佐漆喰などの地場構法に改変を加えてなしとげた、空間を豊饒化する手法、これらが高度にまとめあげられている。その手腕は見事である。ただし、北側にある小学校や図書館など、周辺にすでにある建築や場に対して、この建築が加わることでなしとげられるような新たな環境形成には至っていない。旧庁舎を機能させながらの建設という、極めて厳しい条件であったため、それは無理難題なのかもしれないけれども。

■４つの住宅建築等

環境負荷を下げる建築、特に自然を活かして省エネルギーを図る建築（いわゆる「パッシブ建築」）が世に求められて久しい。にもかかわらず、それができていない建築を多くみかける（高知だけでなく全国各地で）。仮にそういったこととは切り離して建築をつくったのだったら、それを宣言すべきであって、逆にできていないのに、自然環境制御や享受を「やりました」的なことに出くわすことが、いまだ多い。人が居る場所、特に住居において、この「無頓着」は大問題だと感じる。

新人賞の「西分の家」は、切妻のシステマティックな架構空間と、そこから注意深くにずらして形成されたボックス空間からなる楽しさ溢れる住宅である。そこには適切に導入された「パッシブシステム」が備わっている。理想とする魅力的な空間と「パッシブシステム」との両立。ここを起点に、さらには、両者の一石二鳥な相乗効果を備える建築を、この先もされんことを、大きく期待したい。

(2023.11.７)